

真の友情

[聖書] サムエル記上 20章 24～42節

ダビデは野に身を隠した。新月祭が来た。王は食卓に臨み、壁に沿ったいつもの自分の席に着いた。ヨナタンはサウル王の向かいにおり、アブネルは王の隣に席を取ったが、ダビデの場所は空席のままであった。その日サウルは、そのことに全く触れなかった。ダビデに何事かあって身が汚れているのだろう、きっと清めが済んでいないのだ、と考えたからである。だが翌日、新月の二日目にも、ダビデの場所が空席だったので、サウルは息子ヨナタンに言った。「なぜ、エッサイの息子は昨日も今日も食事に来ないのか。」ヨナタンはサウルに答えた。「ベツレヘムに帰らせてほしい、という頼みでした。彼はわたしに、『町でわたしたちの一族がいけにえをささげるので、兄に呼びつけられています。御厚意で、出て行かせてくだされば、兄に会えます』と書いていました。それでダビデは王の食事にあずかっておりません。」サウルはヨナタンに激怒して言った。「心の曲がった不実な女の息子よ。お前がエッサイの子をひいきにして自分を辱め、自分の母親の恥をさらしているのを、このわたしが知らないとも思っているのか。エッサイの子がこの地上に生きている限り、お前もお前の王権も確かではないのだ。すぐに人をやってダビデを捕らえて来させよ。彼は死なねばならない。」ヨナタンは、父サウルに言い返した。「なぜ、彼は死なねばならないのですか。何をしたのですか。」サウルはヨナタンを討とうとして槍を投げつけた。父がダビデを殺そうと決心していることを知ったヨナタンは、怒って食事の席を立った。父がダビデをののしったので、ダビデのために心を痛め、新月の二日目は食事を取らなかった。翌朝、取り決めた時刻に、ヨナタンは年若い従者を連れて野に出た。「矢を射るから走って行って見つけ出して来い」と言いつけると、従者は駆け出した。ヨナタンは彼を越えるように矢を射た。ヨナタンの射た矢の辺りに少年が着くと、ヨナタンは後ろから呼ばわった。「矢はお前のもっと先ではないか。」ヨナタンは従者の後ろから、「早くしろ、急げ、立ち止まるな」と声をかけた。従者は矢を拾い上げ、主人のところに戻って来た。従者は何も知らなかったが、ダビデとヨナタンはその意味を知っていた。ヨナタンは武器を従者に渡すと、「町に持って帰ってくれ」と言った。従者が帰って行くと、ダビデは南側から出て来て地にひれ伏し、三度礼をした。彼らは互いに口づけし、共に泣いた。ダビデはいっそう激しく泣いた。ヨナタンは言った。「安らかに行ってくれ。わたしとあなたの間にも、わたしの子孫とあなたの子孫の間にも、主がとこしえにおられる、と主の御名によって誓い合ったのだから。」

[序] 親友とは

今の若い人たちの友情を知りたいと思って、図書館に行きました。2冊選んでさっと目を通したのですが、心に残ったことの一つをご紹介します。「悩みや心配ごとを相談する相手」は友だちと答える若者は年々増えて約65%。「生き甲斐を感じる人間関係」でも、友人や仲間と居る時と答える若者が64%で、青少年を取り巻く人間関係が薄くなっていると思われている社会状況であっても、友人・仲間の存在が比重を増しているようです。

ただ友達・親友の中味が変わって来ています。何も隠さずに話して付き合う友は、年々減っていき、お互いに深入りしないで距離をとり、それなりの親密さと満足を得てよしとする。交わりを壊して仲間はずれになることを避ける知恵を働かせる人が増えているそうです。

ではどうして、深入りしないで距離をとり、それなりの親密さで満足しようとするのでしょうか。お互いに傷つけない関係とは、自己防衛的で自分を閉ざしている姿ではないのでしょうか。それについて、このような解説がされていました。

自分がどんな仕事につき、どんな人とどんな生活を送り、どんな大人になって生きるのかという人生設計が、昔のように生まれた家庭、親の職業、社会のしきたりなどに左右されず、自由に選べる時代になりました。すると明日のお前は、今日のお前の選択の結果なのだぞというプレッシャーが生じてきて、不安になります。そこで友だちとの相談や助言を、多くの若者が求めるようになったのだそうです。

しかも地縁、血縁、社会規範の束縛が薄くなっただけ、かえって利害や打算を超えた、個人の親愛・信頼を支えとする純粋な人間関係を打ち立てることが出来るのだから、そのことを本人が自覚した時に、もっと距離のちじまった親友をつくる一步を踏み出せるのではないかと、提言していました。

そうですね。自分がどんな道を選び、どんな生き方をしていくかという重大なことを、愛をもって一緒に考え、いつまでも支えてくれる友を、身近に見出せる人は、本当に幸福ですね。その様な友人が親友なのではないでしょうか。

[1] ヨナタンとダビデの友情

サウルは「他の国と同じようにどうしても王が必要です」という民の強い要望によって、預言者サムエルに選ばれてイスラエルの最初の王になりました。彼はアンモン、ペリシテとの戦いに大勝利をおさめ、更に周囲の諸国にも打ち勝ちました。彼は勇敢な戦士を積極的に召抱えました。その中にダビデがいました。彼は未だ兵役にも就けない若者でしたが、巨人ゴリアトを小石一発で打ち倒しで、全軍の注目を集める勇士になりました。

サウルは王として成功を収めるにつれて、主なる神にへりくだって聞き従う信仰をおろそかにし始めました。そして預言者サムエルから見放されてしまいます。主の霊がサウルから離れ、時折悪霊に襲われて錯乱状態になる発作に見舞われるようになりました。ダビデが堅琴を弾くと平安を取り戻します。ところが次々と手柄をたてるダビデに、サウルは妬み、恐れを抱き始めます。堅琴を弾いて発作を癒すダビデを槍で突き刺そうとするようになりました。ダビデは遂に王の許から逃げ出します。

このようなサウルとダビデの間に入って、二人を何とかしてつなぎ止めようとしたのが、サウルの息子ヨナタンです。彼はゴリアトを打ち倒したダビデを見て、優れた賜物を神から豊かに与えられているダビデに心服し、自分の分身のように(口語訳では「自分の命のように」)深く深く愛し合う仲になっていました(18:1)。

ダビデは巨人ゴリアトに一步も引かずに言いました。「お前は剣や槍や投げ槍でわたしに向って来るが、わたしはお前が挑戦したイスラエルの戦列の神、万軍の主の名によって立ち向かう」。「主は救いを賜るのに剣や槍を必要とされないことを、ここに集まったすべての者は知るだろう」。ダビデのこの揺るぎない信仰に、ヨナタンは心からの尊敬を抱いたのです。

それに比べて、自分の父サウルは、戦争に勝利を重ねるうちに、主に聞き従わず、自分の思いで

行動するようになって、主に見放されてしまいました。信仰が弱まるにつれて、人を信頼することも出来なくなります。ダビデを妬み、疑い、恐れるようになっていきました。不安が募ると、激しい錯乱の発作に襲われます。主の霊に満たされる魂の平安を失い、錯乱状態に時折陥る父を、ヨナタンはどんなに悲しんで介護したことでしょうか。

今日の場面でも、涙ながらにダビデの無事を願って、父のもとから逃亡させています。場面は新月祭の宴会のことです。ダビデの姿が二日も見えないのでサウロはヨナタンに聞かされました。「一族の祭りに兄から呼ばれたからというので、許可しました」。サウルは激しく怒り、息子をののしりました。「ダビデが活着している限り、お前もお前の王権も確かではないのだ。彼は死なねばならない」。

ヨナタンは言い返しました。「なぜ、彼は死なねばならないのですか。何をしたのですか」。サウルは怒って、ヨナタンをも槍で殺そうとしました。ヨナタンはダビデのために心を痛め、二日目の食事を取りませんでした。彼は三日目の朝、野に出て行き、隠れていたダビデを呼び出し、互いに抱き合い、口づけし、泣きました。「安らかに行ってくれ。わたしとあなたの間にも、わたしの子孫とあなたの子孫の間にも、主がとこしえにおられる、と主の御名によって誓い合ったのだから」。

ダビデはサウルの追及を逃れて、南の荒れ野や山岳地帯をさまよいます。その間に、サウロを殺す絶好の機会が二度ありました。しかし「主が油を注いで王とされた方を手にかけることは出来ない」と言って、手を下しませんでした。ヨナタンはヨナタンで秘かにダビデを訪ね、神に頼ってくじけないようにと彼を励ましています。「恐れることはない。父サウルの手があなたに及ぶことはない。イスラエルの王となるのはあなただ。わたしはあなたの次に立つ者となるだろう。父サウルもそうなることを知っている」(23:17)。二人は主の御前で契約を結び直しています。

[2] 私はあなたの次に立つ者

イエス・キリストは12人の弟子を選んで、寝食を共にし、ご自分の伝道に彼らを連れて行かれました。彼らは皆、家族も仕事も捨てて主イエスに従いました。彼らは苦楽を共にする大切な仲間でした。しかしその彼らでも、誰が一番偉いかと言うことでは、ライバル意識から自由ではありませんでした。マタイ、マルコ、ルカ福音書には、それが正直に記されています。

更にヤコブとヨハネ兄弟の母が、我が子二人を右大臣・左大臣にして下さいと主イエスのお願いしています。それを知って他の10人が憤慨しています(マタイ 20:21、24)。更にルカ福音書では、主が十字架におかかりになる前の晩、地上での最後の晩餐を弟子たちとなさったその直後でも、誰が一番偉いかと言う議論が再び起こったと記しています(22:24)。どんなに親密な仲間であっても、自分が一番になりたい、人と比べて上に立ちたいという思いが、私たちの親しい友情の裏にも潜んでいるものなのですね。

イエス・キリストがベツレヘムの家畜小屋で誕生された時、東の国から学者たちが星に導かれて新

しい王の誕生を拝みにはるばるやってきました。ヘロデ王はそれを知るや、自分の王位が危うくなると恐れて、ベツレヘム一帯の2才以下の男の子を殺してしまいました。しかし天使のお告げを受けたヨセフとマリアは、直ちにエジプトに逃れて、幼子を守りました。

イスラエルの最初の王サウルも、ダビデの際立った働きを妬み、その信仰深さに神が彼と共に居られることを認めざるをえなくなると、彼を恐れ、憎み、殺そうとやっきになりました。サウルも自分が一番偉くなければ気が済まなくなったのです。

ところがヨナタンは違いました。サウルの第一の王子として、サウロの後を継いで王になるのが当然の身分です。しかし彼は自覚していました。そしてダビデにはっきりと伝えています。「イスラエルの王となるのはあなただ。わたしはあなたの次に立つ者となるだろう。父サウルもそうなることを知っている」

「わたしはあなたの次に立つ者」ここに、ヨナタンの信仰の素晴らしさが示されています。彼は人間的な思いよりも、神さまの思いを第一にして、御心を知ろうと常に心がけて居たに違いありません。だからゴリアトと戦うダビデの姿に、主に全く信頼してどのような大敵にも、怯まずに立ち向かう信仰の素晴らしさに深く感動し、即座に絶大の尊敬と信頼を寄せ、終生変わらずに、彼と真実の友情を持ち続けることが出来たのではないのでしょうか。

ダビデは年老いてから三男アブサロムに反逆されています。アブサロムは家臣を集めて王位につき、エルサレムから父を追い出しますが、逆に殺されてしまいました。ダビデは不肖の息子を失い悲嘆にくれました。一方ヨナタンは、悪霊に襲われて錯乱状態になる父を決して見捨てませんでした。父サウルの傍を終生離れず、負け戦を覚悟して父と共にペリシテとの戦いに出陣し、父と共に戦死しています。

ダビデがサウル王を殺せる機会が二度もあったのに、主に油注がれて王位につけられたお方を貴び、手をかけず、御心を尊ぶ信仰を貫きました。それと同じ信仰を、ヨナタンも王である父に対して持っていたのです。だからヨナタンは、ダビデを憎む父に悲しみ、苦しみながらも、生涯父から離れなかったのです。こうにして同じ信仰を持つ二人が、同じ信仰の絆で固く結ばれて生涯を通したのでした。

[結] 主が間に居てくださる絆

「安らかに行ってくれ。わたしとあなたの間にも、わたしの子孫とあなたの子孫の間にも、主がとこしえにおられる、と主の御名によって誓い合ったのだから。」

これはダビデを送り出すヨナタンの別れの言葉です。父サウルが絶え間なく追求する手をかいくぐって、荒れ野や山岳地帯を避難する苦難の日々が、ダビデの上にこれから何時まで続くのでしょうか

か。ヨナタンとしては本当に切なく、申し訳ない気持で一杯です。でもダビデと自分との間に、また我々の子孫の代になっても、彼らの間にも、主なる神さまが何時も居てくださるのだ。だから私たちは共に主に守られ続けるのだ。大丈夫。安らかに別れようと、言っています。

私たちは大事な契約書には実印を押します。昔は指を切って、血判を押しました。しかし私たち人間が持ち合わせている愛や誠意には、自分を第一とする我欲が潜んでいます。主イエスの弟子たちですら、十字架の死と復活、そして聖霊を注がれるまでは、だれが一番偉いか競いました。だから私たちは、距離を保って傷つき合わない程度の友情で満足しようとしているのです。

神さまが間にたって結んでくださる友情をこそ求めなければなりません。神さまの真実の愛は十字架の死にはっきりと啓示されています。キリストはご自分の命をもって私たちの罪を贖ってくださいました。ここに真実の愛があります。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハネ 15:13)

お互いの間に主が何時も居てくださる絆に結ばれた友情——主が保証人となって、守って下さるのです。これほど確かな絆はありません。この絆に結ばれて、自分が傷つくことを恐れずに、互いに愛し合って生きていこうではありませんか。そして愛の実を結んでいきましょう。

完